

能はやっぱり面白いなど、つくづく思う能を見てきました。7月5日国立能楽堂、シテは宗家・観世清和師の「善知鳥」です。私が能を年に50～60番も見ていた時期は、出演回数の多い宗家の能も良く見ていましたが、今年に入ってから初めてでした。

宗家の謡については人の好みもあるようですが、私は能を拝見して、さすがと思うことが多く、誰が何と言おうと応援をしている一人です。そのきっかけは2001年福岡・大濠能楽堂で見た「安宅」からです。

私は当時長崎に住んでいて、長崎から福岡へ行く電車の中で、発売になったばかりの週刊誌を読みました。宗家の家族問題が大きく取り上げられた記事で、私はこういうことが取りざたされて、宗家の心中は、やはり辛いものがあるだろうな思いながら見所に着きました。舞台に現れた宗家は、心なしか顔色がすぐれず、少し痩せた感じもして、豪快な弁慶を演じ切れるのか案じたほどです。

ところが曲が進むと、宗家の凄気迫と渾身の演技に圧倒され、また演者一同も見事な統一感を醸し出して素晴らしく、心の震えるような感動を覚えました。これは私だけの感想かと言えば、山伏の一人を演じた、その当時の私の能楽師匠も緊張感に溢れて珍しい経験だったと言われました。以後、私は何度か「安宅」を幾人もの演者で観ましたが、これを越える感動を覚えたものは未だありません。

長い能楽の歴史を引き継ぎ、家元としての重責を負うことは一人の人間として、どんなに苦悩の多いことか。それだけに世間的な風評を乗り越え、進もうとする精神力は、共に演じる人に伝わり、観る人々に大きな感銘を与えたのだと思いました。能楽師はやはり舞台が勝負、一期一会の厳しい世界であり、感動こそ芸の価値だと会得したからです。

能「善知鳥」 2017年7月5日 国立能楽堂

シテ・観世清和 ワキ・宝生欣哉 ツレ・清水義也 子方・清水義久 アイ・吉住講 地頭・角寛次朗 等
笛・一噌庸二 小鼓・曾和正博 大鼓・柿原弘和

前シテは焦げ茶の水衣の老人。後シテは黒頭ですが瘦男の面に、腰に鳥の羽を飾った蓑を巻いた獵師。色彩的にはとても地味ですが、「善知鳥」は動きに特徴があつて最初から最後まで面白い。

前場はまずツレ(獵師の妻)と子方が脇座に。(子方が全曲立ち膝で耐えているのがエライ！)

次にワキ僧の名のりがあると、橋掛りからシテの老人が登場。自分は獵師だったが殺生の罪で地獄にいるが、僧に妻子を訪ねて蓑笠を吊ってくれと頼み、自分の証しとして生前にも着ていた着物の袖をスパッと取って渡す。その所作がとても切れ味が良くて新鮮だ。

後場。僧はその袖を妻子に届け、蓑笠に回向すると獵師の亡者が現れる。自分は善知鳥という鳥が「うとう」と呼ぶと子が「やすかた」と答えると言う習性を利用して捕獲をしていたが、親子の絆はこんなに深いものか。自分が死んだ今、もう一度我が子を抱きしめたいと思い、子供に近づくが叶わない……。

このクライマックスの緊迫した、しかも敏捷な動きの場面は能ならでの表現でドキドキ。また、この後で獵の様子を再現する場面で、シテの息の長い一言『うとう』は、絶品で強烈な印象を受けました。

この日の地謡も素晴らしくて、観世本家の巧者が寄り集まって息がピッタリと合い、物語の内容と共に、静かだったのがぐんぐん大きな山のようなうねりになり、とてもドラマチックな謡い方に惹きこまれました。

この能で、妙に感心したことは、シテが杖を放ると囃子方の間をすり抜けて(?)いたり、蓑笠を放ると子方の眼前でピッタリと止まったりすることで、こういうことは能面を付けてする所作としてはかなり熟練していなければならず、とてもプロフェッショナルな気がしました。

もともと能楽は形式美だと思うけれど、形式美が成り立つには相当な訓練が必要で、それをクリアするのがプロフェッショナル。その上、この「善知鳥」を観ていると、大変ドラマチックでやはり能は演劇としても、とても面白いということに気づかされます。紙面で書ききれない程奥も深く、また観に行きたい能でした。

